

教室から広がった世界がもたらしたもの

鳥取県福部村立福部小学校 谷口 義昌

実践の目的

福部村には、小・中学校は1つだけしかなく、幼稚園から中学校までの11年間、子どもたちはクラス替えもなく、閉鎖的で固定化された人間関係の中で生活している。教室にあるパソコンを使って、WEB 学級日誌に取り組むことで、教室外の世界とつながり、交流が始まる。全国の小学校との学級日誌の比較、情報宝箱での情報交換などを通して、自分・クラス・地域を見直し、良さを再発見し、前向きな姿勢を持つようになると考える。

実践内容

活用をはじめた当初の子どもたちの反応は、日直の仕事が増えるという反応（負担）とパソコンが使えるという反応（喜び）と半々だった。これと同時に必要なときだけ電源を入れるのではなく、学級のパソコンは常時電源が入った状態になった。児童のパソコンへの興味関心の大きさと、当初の取り組みには差があったが、うまく打てている日誌を紹介しながら、スタートした。学級日誌を書くよりも多くの児童が時間を割いていたのが、情報宝箱である。他県の学校の日誌を見てみたり、HPを見たりしていた。簡単にメールが出せるということと、コインを集めてみたいという気持ちからか数名の児童がいろいろな学校にメールを出し始めていた。これは、教員が声をかける前に始まった。それをクラス場で取り上げた。表現としていいものと悪いものを取り上げて話をした。自分たちが休憩時間に進んでやったことをほめられたということが子どもの更なる意欲付けになったようで、その後もしばらくはいろいろな学校にメールを打ち続け、帰ってきたメールに返事も書くようになった。全国地図の中から、5月に転校していった同じ県内の6年生の学級を見つけメールを書いたり、北海道の小学校からメールが届いたり学級という垣根をパソコンによって確実に越えていった。

広がる世界は、キーボー島アドベンチャーへとつながった。存在は前から知っていたが、子どもたちに挑戦させるタイミングを模索していた。そんな時、ふと教室のパソコンの画面を見ると子どもがキーボー島に挑戦していた。情報宝箱からみた他校のHPから存在を知り、体験していた。「先生、このHP面白いなあ。」とつぶやく子ども。そして、周りにいた子どもたちも同様の反応だった。これだ。と思った。早速その日のうちに学級全員を登録した。子どもたちは自分のIDやパスワードがあることに喜びを持った。休憩時間はもとより、朝や夕方、自宅、そして放課後には公民館の端末を使い挑戦していった。熱中が続くのは3週間ぐらいだった。ある程度個人差はあるが、なかなか進級できない状態にどの子どももなった。できないとあきらめやすい傾向があった。粘りが無い。そこで、キーボー島の事務局から送られてくるメールマガジンから参加者数と1～5級までに進級した子どもの割合を話した。当時は、参加者の2%ほどであった。そのことから、他の学校の参加者も同じように壁にぶつかりながらも、一生懸命取り組んでいる。一生懸命取り組んだ人こそが進級でき、その喜びは計り知れないと伝えた。WEB 学級日誌を通して他校とのやりとりをしていくなかで、子どもたちはモニターの向こうに広がる同じ小学生とのつながりを感じていた。そのため、他校の友だちと一緒にがんばろうという気持ちになることができた。実際にあったことはないし、あえないかもしれない。ただ、同じように取り組んでいる友だちの存在が支えであった。

今までの子どもたちは、あまり学校の中でも認められてきておらず、どこか卑屈な部分さえあった。それが、自主的にパソコンにさわって、自分がやったことが認められ、キーボード入力などで力がついている。これらが子どもに自信を与えた。ほめられることの少なかった子どもたちがほめられ認められ、自信を持ち、学校生活の場でも最高学年として活動できるようになった。2学期の終わりには、他学年へキーボード入力を教えたり、声をかけたりする姿が見られるようになった。

教室にパソコンが入り、インターネットを通して教室から飛び出すことができた子どもたちは、WEB 学級日誌とキーボー島によって、自分たちを振り返り、良さに気づきながら、自信を持つようになった。本校のような子どもの育ちが2005年の教室環境で可能になる。